

認知症対応型デイサービス(優っくりデイサービス)の取組み

地域の安心拠点として

優っくりデイサービスが
ケアの専門性をつきつめる理由!

当法人の認知症対応型デイサービスは**在宅生活を一日でも長く過ごしてほしい!**そんな想いから平成24年12月に世田谷区喜多見で喜多見認知デイ、平成26年10月に杉並区本天沼で沓掛認知デイをスタートし、認知症ケアの専門性を高めてきました。認知症ケアの専門性を高め、地域のために行動に移して来た喜多見認知デイと沓掛認知デイをご紹介します。

重介護度医療支援 喜多見認知デイ

喜多見認知デイのご利用者の平均介護度は4.0。常時介護が必要なご利用者が入所する特別養護老人ホームとほぼ同じ介護度です。喜多見認知デイでは重度認知症ご利用者や、医療的ケアが必要なご利用者のケアを可能にするため、認知症ケア専門士や看護師、認知症実践者研修や客痰吸引の研修を受講したケアスタッフを配置しています。この体制により、お一人おひとりに合わせたケアができ、在宅生活を長く支援させていただきます。



一般職員として現場にいたころからご本人が『最期まで住み慣れた我が家で暮らしたい』、ご家族も『その気持ちを尊重したい』、その気持ちのお手伝いが出たらといつも考えていました。

責任者になってからは認知症対応型という専門性を活かし、自宅を訪問、ご家族の話やご本人がしたいこと、望むことを聞きだし、認知デイでどの様な支援ができるかを実施しています。重度の認知症の方でも、過渡期を迎え不安でいっぱい認知症の方でも、重度医療者で身体が不自由でも、在宅生活を支援する。そう決めた想いを今まさに実現しています。

優っくりデイサービス喜多見 事業所責任者 坂本 美紀

デイサービス
喜多見・沓掛の
特徴

認知症ご利用者そしてご家族のニーズを訪問や面談を通して把握し、その方に合った個別ケアを認知症ケア専門士や看護師、ケアワーカーと連携し、実施しています。周辺症状にはスタッフ全員で取り組み、その方の居心地のよい環境は何かを考え、ケアマネジャーとの連携も大切に、どのようなご利用者も断らないことを大前提としています。受け入れが困難な時は必ず代替案を出し、どの様にしたら受け入れるのか?何をすればご利用者、ご家族にとって良いか?を日々考えています。その結果、両施設合わせて毎日90%以上の稼働率を維持させていただいています。

重度認知症支援 沓掛認知デイ



沓掛認知デイは、ご利用者お一人おひとりの行動にとことん寄り添うケアを実践しています。例えば、重度の認知症で失語症のご利用者には、いつ外に行かれてもいいようにスタッフ全員が常に携帯電話を常備し、外出された際には、どこまでもとことん一緒に付き添い、ご利用者の想いに寄り添うケアをすることで、沓掛認知デイがご利用者の安心できる居場所となり、今では毎日来所され、夕方まで滞在、「帰らない」と言われるまでになっております。

このようにお一人おひとりに合わせたケアをすることで、認知デイは一般的に12名定員で稼働率60%程度と言われている中、沓掛認知デイは24名定員で常に稼働率100%を維持しています。

在宅生活を一日でも長く過ごしていただくために、アセスメント表を用いてご利用者・ご家族・ケアマネからとことんニーズを聞き出し、関係性向上から私たちの支援はスタートします。責任者として把握したニーズをもとに、現場スタッフには私たちが今何をすべきかをミーティングや面談・会議等で納得するまで伝えさせてもらっています。ご家族・ご利用者がいるから私たちがいる。スタッフがいるから私がある。今もこれからも皆様のおかげで沓掛認知デイがあるという思いで、取組んでいます。

優っくりデイサービス沓掛 事業所責任者 新村 栄子

8月にオープンした笹幡認知症対応型
デイサービスセンター

笹幡認知デイのコンセプトは「**住み慣れた地域・自宅でこれからも暮らし続けたいと願う、認知症をお持ちの方とそのご家族を支援するデイ**」です。

認知症になると、見当識障害等によりこれまで出来ていたことが出来なくなる傾向がありますが、「できない事」に目を向けるのではなく「出来る事」と「支援があれば出来る事」に着目し、その能力を可能な限り維持し、その方がその方らしい暮らしが出来るよう関わりをもつことが認知症対応の専門性ではないかと感じています。

そのために必要なのがアセスメントと関係性作りで、その方自身と家族が不便を感じていることや支援を必要としている事を的確に把握した支援でないと、ただの押しつけになります。アセスメントでは身体的・精神的な情報を把握します。関係性作りでは、その方とご家族の主訴を把握するよう努めます。その両輪がうまくかみ合えばはじめてプロの支援が出来るものです。

「認知症の人」ではなく「認知症の“人”」であることを念頭におき、その方がその方らしい毎日を送れるよう支援したいと思います。

渋谷区ケアステーション笹幡
高齢者在宅サービスセンター
認知症対応型通所介護 責任者 田中 千春



25年以上前の話になりますが、母方の祖母が重い認知症で、警察のお世話になった回数は数えきれません。しかし、祖母の存在がなければ私は介護の仕事を目指さなかったと思います。今の私があの時祖母の傍にいたらもっと何かが出来たのだろうか?と思う事があります。もう祖母はいませんが、今笹幡に通われているご利用者やご家族に、当時感じた「もっとおばあちゃん達が楽しそうに過ごせればいいのになあ」という思いを少しでも実現するお手伝いが出来れば、と思っています。笹幡認知デイで大切にしていることは「**個別支援をする時間を毎回必ず設ける事**」と「**役割を持って過ごす**」の2点です。人が人として生きるという当たり前の毎日を実現できるよう、「地域社会の中で一員として生きること」と「自宅でその方が穏やかに生活すること」を支援するデイを笹幡の価値としてこれからサービスを展開していきたいと思っています。

For You 新聞 2018 October Vol.9 2018 10月31日発行

社会福祉法人 奉養会(ほうようかい) 法人事務局 154-0012 東京都世田谷区野沢1丁目4番15号 真井ビル5階
TEL:03-5712-3770 FAX:03-5712-3771 http://www.foryou.or.jp/



認知症ポジティブ

認知症介護研究・研修東京センター長 山口 晴保

かつては神経病理学者であった私が、認知症介護研究・研修東京センターのセンター長とは大変人、いえいえ大変身です。42年前に医師になったのですが、患者さんを診るのが恐く、基礎系の神経病理学を4年間学び、その後、神経内科に入り、アルツハイマー型認知症の脳の病理研究を始めたのです。そして、医師になって10年して理学療法士や作業療法士を育てる部門の教員となり、必要に迫られてリハビリテーション専門医となりました。こうして、病理→神経内科医→リハビリ医と変わった経歴の私が、認知症ケアの道に入ったのですから貴重な変人です。とはいえ、大変身を遂げた勢いで、世の中の認知症に対する

偏見を打ち破ろうと、「認知症ポジティブ」というアドバランを上げたのです。認知症をポジティブに捉えていこうという認知症ポジティブ(Dementia-positive)を提唱し、普及啓発を計っているのです。

有吉佐和子『恍惚の人』以来、認知症は、なりたくない病気の代名詞となりました。そして、『認知症にな

ると不幸』、『認知症の介護者になるのは大変』という社会常識ができあがってしまいました。しかし、私の周囲には、認知症になっても幸福な人はたくさんいます。認知症介護に生き甲斐を感じている人も

います。私たちは、認知症の人が、認知症という生活の困難を抱えながらも、前向きに明るく生きられることを目標として、研究と研修に励んでいます。

認知症は長生きの勲章です。95歳以上まで長生きする人の8割が認知症になります。長生きと認知症はセットが基本です。認知症の人の大部分は、戦争や他の病気で死ななくて長生きできた幸運な方です。「認知症になれるまで長生きできて良かったね」「認知症になっても楽しく暮らせるね」が社会常識となる世の中を目指し、認知症ポジティブを提唱しています。

認知症ポジティブは、二つの概念から構成されています。一つは、認知症の人が持てる能力を発揮して、他者の役に立ち、褒められ、そして、その人の尊厳が守られる。家族も、周囲の人たちや専門職に支えられ、ケアのコツを理解して楽にケアする。そして、家族が困る妄想や暴力などの症状(BPSD)は予防する。これがDementia-capable(認知症になってもいろいろなことできる)という考えです。

もう一つは、認知症の人が地域に受け入れられ、差別を受けず、地域の中で活躍する場があるDementia-friendly communityという考えです。

この二つが揃った認知症ポジティブで、『認知症になっても幸せに生きられる』のです。「みんなが笑顔の認知症ポジティブ」、認知症があってもなくても、皆がチカラを発揮して他者に役立つ社会をめざしましょう。これが、ノーマライゼーションの流れです。

認知症になるのが心配とネガティブな気持ちを持っているより、認知症になれるまで長生きしようと前向きでポジティブに生きる方が楽しいですよ。楽しく生きると寿命が伸びて、『いずれは誰もが認知症』なのです。運が良ければ・・・ですが。

Profile 山口 晴保(やまぐち はるやす)

1976年群馬大学医学部卒業。同大学院で神経病理学を学び卒業後(医学博士)、同年神経内科に入局し、アルツハイマー病の研究を開始して以降、病態解明を目指して30年にわたって研究を続けた。1986年に群馬大医療短大助教授、1993年に同教授。1996年に群馬大学医学部保健学科教授。その後、組織替えて群馬大学大学院保健学研究科教授。近年は、認知症の診療術、認知症のリハビリテーション、介護予防、群馬県内の地域リハビリテーション連携システム作りなどに注力し現在に至る。

問合せ先

山口晴保研究室ホームページ: <http://yamaguchi-lab.net/>
奉養会 等々力の家居宅介護支援事業所: [todoroki-kyotaku@foryou.or.jp](http://todoroki-kyotaku.foryou.or.jp)

より良い地域福祉をめざして。

私たちは地域の方々が安心して住み続けられるよう、さまざまな工夫を続けています。その中で、各事業所の実施している活動の様子を事例でご紹介いたします。

認知症を患った「家族」へのケア

～優っくり小規模多機能介護池尻の取り組み～

■ 優っくり小規模多機能介護だからこそできた「家族2世代“丸ごと”在宅生活支援」

優っくり小規模多機能介護池尻(以下、池尻)は在宅生活支援のために「家族に寄り添うこと」を大切にしてきました。今回は、母親イネ様、その長男夫婦と次男の家族4人、2世代で暮らしているご利用者家族に寄り添った在宅生活支援についてご紹介します。

2011年 池尻との出会い

みち子様は、認知症を患っていたイネ様への献身的介護に心身ともに疲労されていました。そこで、イネ様がお泊りを中心に池尻を利用されることになり、みち子様は一郎様と菊次郎様との充実した生活を再び送ることができました。



2013年 家族に寄り添う

みち子様、一郎様、菊次郎様は、月に一度イネ様に会いに必ず池尻に来てくださり、一緒に食事をしたり、家族会やイベントにも必ず参加していただきました。



2016年 小さな異変

この頃、一郎様と菊次郎様がスタッフにイネ様の年齢を何度も尋ねたり、菊次郎様が髭も剃らず風呂にも入らなくなったなどみち子様から池尻スタッフへ相談があり、二人の小さな“異変”を感じ始めました。



2017年 兄弟の認知症が判明

兄弟二人とも認知症であることが判明。みち子様は二人を近所のデイサービスに通わせようとしたのですが、強い拒否があり、外出も嫌がるようになってしまいました。



2018年 7年間の絆



デイを拒否されることを想定し、みち子様と居宅支援事業所、池尻スタッフは連携を図り、顔なじみのスタッフが居て安心できる池尻をご利用いただくこととなりました。外出を嫌がっていた一郎様は現在、大好きなカラオケを楽しみに毎回休まず通われ、菊次郎様は楽しくレクリエーションに参加、1年ぶりにお風呂にも入られました。



長男の嫁
みち子様

家族皆が認知症になり途方に暮れましたが、優っくり村さん(池尻)がいつも気にかけてくれたので、あまり不安にならずにいられました。兄弟がすんなり優っくり村のサービスを受ける事ができたのは、スタッフの皆さんがいつも優しく声をかけてくれ、顔なじみであったことだと思います。そして、優っくり村は“母を大切にしているところ”そが大きい兄弟の心に響いたのだと思います。



主任
佐藤 芽美

当初は「お母様がいるから来所される」と安易に思っていました。それだけではなくご兄弟と私たちとの間に、7年間築き上げた信頼関係という“絆”が芽生えていたのだと思います。これからもご家族が気軽に足を運べる環境づくりとご本人とご家族が楽しめるイベントを企画していきます。

実現するために
実行したこと

2か月に1度



家族会

年2回開催



運営推進会議

年2回開催



日帰りバスツアー

24時間365日



いつでも面会可能
柔軟な対応

ご家族の要望を
全て聞き入れる

本人のみならず、家族への関わりを大切にしてきた結果、変わらぬ家庭の温もりを再現した優っくり村になりました。

認知症の「本人」へのケア

～等々力の家居宅介護支援事業所の取り組み～

東京都世田谷区

等々力の家居宅介護支援事業所
責任者 佐々木 克祥

私が
ご報告
します!



■ 本人の声なき声を拾いあげ思いをつづり伝える ～本人の尊厳を守り、心に寄り添う～

等々力の家居宅介護支援事業所では、日々、本人の気持ちやアイデンティティを大事にした支援をどのようにしていくかを考えています。その中で、一つの支援として「わたしの手帳」を活用し、ケアプランに反映させています。

「わたしの手帳」とは、認知症介護研究・研修東京センター研究部長の永田久美子さんが監修し、本人が生きていく場所としているもの、また日々の暮らしの様子などをつづる小さなノートです。アセスメントでは身体面や認知面などは把握できますが、本人がどういった人なのか、何を大事にし、どういった価値観をもっているのかがわかりにくいので、本人の心の内や生活の多彩さ、持てる力などを見るためにはちょうど良いツールでした。

わたしの手帳を地域に広め、その人の希望や本当に困っていることが見えてくると、施設内や地域全体のケアの本質を見直すきっかけにもなり、また支援の手掛かりが得られます。「わたしの手帳」を活用し、一人ひとりの心の声に耳を傾けてはみませんか?



70歳代の女性Aさま 要介護1

手帳に、記憶が失われていくことへの不安や葛藤を書きました。「今までできていた料理ができない」「高血圧など持病を抱えているのに、服薬管理もできなくなった」など、ケアマネジャーから主治医に伝えていただき、結果、脳にかなり委縮があることがわかり、アルツハイマー病治療薬を処方することになりました。また、町内会の役員にと誘われた時、娘とともに向かい「認知症だから」とカミングアウトしました。自分の病気をつつみ隠さずに伝えることで、地域の人々から理解が得られ、それがまた支えになっていくに違いないと感じました。



アルツハイマー型認知症を患った80歳代の女性Aさま 要介護1

母と娘というのは、あれこれ言う口論になったりするけど、手帳に書いて伝えるとワンクッション置けるので、自分の内心が伝わり、わかってもらえました。例えば、「今日の晩ご飯に、これ買ってきて」とか「私が料理するね」と、頼み事や相談もしやすい。娘は「こんがらがった紐がほどけていくような感じだった」と話しています。



問合せ先: 奉優会 等々力の家居宅介護支援事業所 Mail: todoroki-kyotaku@foryou.or.jp

地域住民がつくる認知症ケア

～練馬区立はつらつセンター豊玉の取り組み～

■ 地域住民がつくる認知症講座

はつらつセンター豊玉では、平成25年から地域住民が主体となって行う認知症講座を継続的に開催し、今年3月に第9回目を行い、延べ200名以上の方が参加されています。

講座の内容は、テキスト・DVD等を使った学習、専門職による講話、座談会などバラエティに富んでおり、中でも認知症のことを楽しみながら学べる寸劇は、毎回盛り上がる人気企画です。今号では、第4回「暮らしに活かそう体験談」より、寸劇「認知症の方への関わり方」の製作過程と運営に携わった方をご紹介します。

第4回「暮らしに活かそう体験談」 参加者25名

寸劇「認知症の方への関わり方」では、認知症の方への声掛けの方法などを実践的に学びました。



台本、配役等を検討。



リハーサルも本番同様に熱演!



いよいよ本番! 観るだけでなく参加してもらうことで、より実践的な学びの機会になりました。

| | | | | | | |
|--------------|-----|--------------------|-----|--------------|-----|----------------------|
| 認知症講座を9回開催!! | 第1回 | 認知症サポーター養成講座 | 第4回 | 暮らしに活かそう体験談 | 第7回 | 気になったら声かけましょう! |
| | 第2回 | 認知症になっても安心して暮らすために | 第5回 | みんなで話せばこわくない | 第8回 | ものわすれ。はっ!!としたり手を伸ばそう |
| | 第3回 | みんなで守れる街にしよう | 第6回 | 家族でホットな思いやり | 第9回 | あたたかく、見守りましょう |

地域住民インタビュー



富澤 笑子さん

私自身も認知症の役を演じて「わからないことへの不安」を感じる事ができました。地域の中で孤立しないよう、より多くの方に認知症への関心を持ってほしいと強く思い、活動しています。



風間 秀雄さん

寸劇では、前から落ち着いた声でゆっくり話しかける等、基本的な接し方を繰り返して学びます。また、観ている皆さんも寸劇に参加して頂く事で、より理解を深めることができると思います。